

四万十川と沈下橋。人と川とが共に生きる風景。…四万十市…

清流通信読者の皆様、こんにちは！ 四万十川の風景の中に必ずと言っていいほど登場する『沈下橋』。今回は、四万十川下流域四万十市から、沈下橋の話です。

◆ 四万十川と沈下橋、その保存方針 ◆

大水の時には水面下に沈む欄干のない橋“沈下橋”。水面までの距離が短く、その橋の上に立てば水の様子がつぶさに見て取れます。沈下橋は集落と集落をつなぐ生活道として、憩いの場として、また夏場には子供達の遊び場として、流域の人々の生活に無くてはならないものであり、その自然と調和した構造物は、四万十川の景観を彩る、重要な構成要素の一つです。

四万十川流域では沈下橋（チンカバシ）と呼ばれるこの橋は、潜水橋・もぐり橋・沈み橋などと呼ぶ地域もあり、1999年高知県の調査によれば、全国の一級河川とその支流の合計410カ所に存在し、そしてそのうちのなんと60以上が、四万十川流域にあるのです。ではなぜ、四万十川には沈下橋が多いのでしょうか？

四万十川が流れる高知県西部は、毎年のように台風が襲来し度重なる水害に遭ってきました。このようななか建設された橋は、増水時には橋が水面下に没して流木などが引っかかるように考えられ、またその形状故に建設費も比較的安く抑えられるということで、多くは昭和30年以降の日本の高度経済成長期に架けられました。その後、いくつかの沈下橋は取り壊されたり抜粋橋などに取って代わられるのですが、高知県では1998年7月、沈下橋が生活・文化・景観・親水等の観点から重要な役割を担っていると考え、「防災上、維持管理上支障のない沈下橋は保存を基本とし、生活道に加え生活文化遺産として後世に引き継ぐ」とした「**四万十川沈下橋保存方針**」を策定し、四万十川の沈下橋は、重点的に保存・維持管理の方針がとられることとなりました。

この「四万十川沈下橋保存方針」の対象となる橋は、四万十川にある60余りの沈下橋のうち、市町の道路・農道・林道台帳に記載され管理者がはっきりしているもので、本流に21橋、支流に26橋の合計47橋です。

◆ 四万十市 四万十川本流に架かる9つの沈下橋 ◆

四万十市には、この保存対象沈下橋47橋のうち20橋がありますが、そのうちの9橋が四万十川本流に架かる沈下橋で、その川幅から上流域や支流に架かる沈下橋よりも大きく、9橋全てが120m以上です。

① 岩間沈下橋

四万十市西土佐岩間にある、橋長120m幅員3.5mの橋。『四万十川の沈下橋』として、ポスターやTV等によく登場する。周辺には四万十川らしい景観が広がり、橋は実際より大きく長く見える。また、沈下橋のバックに見える右岸の山林（左奥）は、この4月に「四万十の日実行委員会」等が中心となって、天然林などの過剰な商業伐採を防ぐ目的の“森林トラスト事業”で、「景観保全モデル林」として借り上げることを決定した。

② 佐田沈下橋

通称佐田沈下橋（今成橋）は、四万十川最下流にあり、最長の291.6m幅員4.2mの橋。観光客には最もなじみの深い橋で、春には周辺に桜や菜の花が咲き、美しい景観が楽しめる。



春の佐田沈下橋

③ 長生（ナガオイ）沈下橋

四万十川がその流れを河口方向に大きく変える場所、四万十市西土佐にあるこの橋は、橋長120m幅員2.8mと乗用車一台がやっと通れるほどの狭い橋だが、住民にとっては集落と国道をつなぐ重要な生活道。橋の中ほどに『翼』があり、夏ともなれば水遊びをする子供達の歓声で、ひととき賑やかな橋となる。しかし、この8月上旬の集中豪雨、台風9号によって、無惨にも橋が壊れ、現在は通行止め・復旧工事待ち。



四万十市、四万十川本流に架かる沈下橋9橋



(09.8/5撮影)



長生沈下橋(09.8/14撮影)

◆ 沈下橋は、四万十川と共に暮らす人々の象徴 ◆

そこに暮らす人々が、自然と折り合いをつけて生きていく生活の知恵として生まれた橋、沈下橋。四万十川に架かる沈下橋は、“自然を制圧するのではなく、あるがままの自然を受け入れ、自然と折り合いをつけ共存していこう”という、流域に住む人々の『生活様式』を象徴するものと言えるのかもしれない。



岩間沈下橋